

明治大学政治経済学部
西川伸一ゼミナール機関誌

BEYOND THE STATE

第 24 号



2023・3・26

巻頭言



第19回OB・OG会(2022年10月29日)
@上海庭神保町店

巻頭言・若い人を羨ましいと思わなくなってしまった

西川 伸一

「若くていいね！」

これは中高年が若い人に声かけする常套句だろう。私も学生たちにずいぶん似たようなことを言ってきた気がする。まだ三〇代後半だったころ政治経済学部の学部ガイドへの執筆を依頼されて、私はこう書いている。

「ぼくが好きな映画『バック・トゥー・ザ・フューチャー』に出てくるようなタイムマシンがいま現れて、「おまえの望む時代に行かせてやる」といわれれば、ぼくは即座に「1980年」と答えるだろう。1980年、ぼくは大学に入った。(略)ぼくがもう一度やってみたいと思うのは(略)大学の4年間なのである「政治経済学部(一九九七)『98学部ガイド』二六頁。

「年齢六〇を過ぎた現在、同じオファーをされればどう答えるか。いえ、いまの時代でけっこうです」と言うのではないか。この文章を書いてから四半世紀が過ぎた。その間、さまざまなおことがあった。思い出すのはなぜかいやなことばかりである。

朝起きると子どもが熱っぽい。体温を測ると三八度以上ある。これでは保育園で預かってもらえない。私と妻のどちらかが仕事を休んで、子どもを小児科に連れていって看病しなけ

ればならない。どちらが休むかで大げんかしたことが、数え切れないくらいあった。

三〇代という最も論文が書けそうな年代なのに論文が一向に書けない。専任講師だった私を後輩たちが助教授(いまの准教授)となつて追い抜いていく。いつの間にか、私は専任講師だね」と注意を受けた。ようやくなんとか論文数はそろえたものの、助教授昇格の審査では「研究者として初歩的なことができていない」とこっぴどくたたかれた。

四〇代前半に刊行した本をめぐつて、そこに名前を挙げた元官僚から名誉毀損で訴えられて裁判闘争を余儀なくされた。一審、二審、そして最高裁といずれも私の敗訴で一〇〇万円の慰謝料支払いを命じられた。その結果、給与が差し押さえられた。

五〇代になると学会などで責任の重い仕事を任されるようになった。「長」のつくポストで外見的にはかっこいいのだが、要するに調整役で名だたる先生方の間で右往左往した。それは学部内でも同じで、あるときは罵倒され心療内科のお世話になったこともあった。一方で、新潟の実家に一人暮らしをしていた母親の認知症が進んで、実家を売却しこちらの施設に入所させる手続きにも手こずった。

こうして一昨年に還暦に達した。だから大学入学時からもう一度やり直すなど、絶対にごめん被りたい。ただ、あとに述べる太田裕美が一九八〇年六月の和泉祭(いまではかつての駿台祭と統合されて明大祭)で歌っている。これだけはみたい!

ところで、政治学科一年生必修の「政治学・社会学総合講座」を長年担当してきた。かつては、私語をする学生に対して声を荒げて注意したものだ。コロナによるオンライン授業が二か年度続いて、昨年四月に久しぶりの対面での授業となった。すると学生をきつく注意できないのである。彼らが自分の年齢になるまで波瀾万丈の人生が待ち受けている、たいへんだなどと妙な同情が先に立ってしまった。若い人を羨ましいと思わなくなったのだ。こういうのを「老い」というのだろうか。

私が中学時代からずっとファンの太田裕美の曲に、「First Quarter 上弦の月」(一九九九)という名曲がある。本人が作詞・作曲している。「振り返るたび 遠ざかる日々 だから前を向いて歩こう」という歌詞ではじまる。若者を羨ましがらずに前を向いて歩くぞ!

二〇二三年一月一五日 かつての成人の日に